

総評

第12回「全国小・中学生障害福祉ふれあい作文コンクール」には、豊かな感情体験を通して得られた、気づきや学び、そして感動を丁寧に描いた作品が、全国から多数寄せられました。ご応募くださいました1532名の生徒の皆様をはじめ、作品募集にあたりご尽力いただいた都道府県協会の皆様、並びに本コンクールの趣旨にご理解とご協力を賜りました全国の小・中学校の先生方に、心より感謝申し上げます。

応募作品に共通して表現されていたことは、障害特性を背景に、日々の生活のなかで試行錯誤し、自分自身と真摯に向き合い、理解し、乗り越える姿を目の当たりにした人たちが、そのひたむきさや前向きな姿勢に心を打たれたという記述です。書き手のまなざしは決して一方的な感情にとどまらず、相手を理解しようとする過程や、関係を築くなかで生まれる葛藤や発見を丁寧に描き出されており、そこに本コンクールの意義が表れていました。

逆境や困難を乗り越える力は、『レジリエンス』と呼ばれます。

失敗や挫折、病気やケガなどのストレスの大きい出来事は、障害のあるなしに関わらず誰もが経験することです。それをどう受け止め、乗り越えるか、どの人もその問いに向き合わなければなりません。

作品の多くにおいて、障害のある方の生きる姿から、困難に直面したときにどう向き合い、どう乗り越えていくかという示唆を受け、それを自らの生き方へと引き寄せて考える姿が見受けられました。他者の経験を通して、自身のレジリエンスを見つめ直し、高めていこうとする内面的な変化は、まさに本テーマの核心に触れるものです。

本コンクールが、互いの違いを理解し合い、ともに生きる社会への一歩となるとともに、参加された皆様一人ひとりの心に、しなやかに生きる力を育む契機となったことを、心より嬉しく思います。今後もこのような学びと共感の輪が広がっていくことを期待しております。

公益財団法人 日本知的障害者福祉協会

会長 樋口 幸雄

